

Kenkyusha Dictionary of Applied Linguistics

編集主任：小池生夫

編集委員：井出祥子

河野守夫

鈴木 博

田中春美

田辺洋二

水谷 修

応用 言語学 事典

研究社

はじめに

社会言語学とは

言語を研究対象や関心領域としている研究は、言語学、社会言語学をはじめ、社会学、文化人類学、心理学、教育学、民族学、詩学など多岐にわたっている。その中でも、社会言語学は言語が個人の有する知識を超えて、それを話す人々の共有の知識であり、その人々が属する集団と切り離して考えることはできないという考えに基づいているものである。これは、Chomsky (1965) に代表される理論言語学が、言語体系の中で言語的普遍 (language universal) を重視した自律的な研究を志向するのとは一線を画している。Hymes (1972) は言語を社会的カテゴリーと関連させ、社会生活全体の中に介在するものとし、Pride (1970) は言語を文化および社会の一部として研究するもの、また Hudson (1980) は、社会から離脱した見解は基本的に不完全な言語学へとわれわれを導くので、言語は社会との関連においてとらえるべきものとしている。さらに Wardhaugh (1992) は、適切な言語理論というのは言語の使用について言及すべきで、各個人は言語変異を自分の思うままにはできず、そこには話者集団の規範が存在するとしている。社会言語学とは、言語の社会に対する関係について研究するという主題が重要であり、それ以外の定義や範疇などを規定すべきではないと述べている。社会言語学が学際的で、従来の学問的定義や概念、研究領域などを特定しにくいのは、このような性格からきている。

社会言語学者の中には、社会言語学プロパー(唐須 2000) と呼ばれる Labov (1966, 1972b) や Trudgill (1974b, 1983) のように、言語変異理論と言語変化研究を社会言語学の領域と定め、「言語と社会の研究」と「社会言語学」を明確に区別している研究者もいる。また、Hudson は、社会言語学は「社会との関連における言語の研究」であり、「言語との関連における社会の研究」は「言語の社会学」であると規定している。

このように社会言語学は、あくまで「言語と社会との関連」という「主題」にこだわりながらも、あえて自らの定義や領域に固執せず、開放系の研究として存在しているところに大きな特徴がある。

社会言語学の起源

科学としての言語学は、ヨーロッパでは、20世紀初頭の Saussure (1959) を起源とし、Jakobson に代表されるブラグ学派による音韻論、文法論、文体論、さらにはその後の記号論、構造主義という流れの中でその基礎が形成された。

一方アメリカでは、Boas (1911) や Sapir (1921) の研究を出発点とし、Bloomfield (1933) の構造主義的方法が提唱され、科学としての言語学が確立された。

こうした流れを背景に、20世紀の言語学を大きく転換させたのが Chomsky (1957) の Syntactic Structures (統語構造) である。この Chomsky の主張に異を唱えたのが、1964年にインディアナ大学のアメリカ言語学会に集まった、Hymes, Gumperz, Haugen, Ferguson, Fishman,

Labov, Grimshaw, Bright らであり、この学会が社会言語学の発祥となり、その後の社会言語学の発展につながった。こうした背景には、ヨーロッパの社会言語学者たちの少数民族 (minority) 言語研究や、アメリカの公民権運動の影響による多民族・多文化主義が影響している。

社会言語学の視点

言語と社会の関係から言語を考えるという主題は、次の3つの視点に分けられる。第1は「言語構造や言語行動が社会構造に影響を及ぼす」という視点。第2は「社会構造が、言語構造や言語行動に影響を及ぼす」という視点。第3は「言語構造と社会構造が互いに影響し合う」という視点である。

第1の視点の背景となるのは、「サビア=ウォーフの仮説」と言われる言語相対論である。Hymes (1964) は、この言語相対論をもとに社会における言語機能の相対性を具体的に明らかにした。すなわち、文化人類学のエスノグラフィーの手法を応用した「ことばの民族誌」により、言語分析の対象を文や発話から談話にまで拡大した。その中でコンテキスト(社会的文脈)という概念を用いて、言語と人々の思考形式やものの見方との相関を明らかにしたのである。

Hymes は、「ことばの民族誌」により、言語をコミュニケーションの枠組みでとらえる「伝達能力」(communicative competence)の解明を目指した。言語行動の規則(関係)や機能を明らかにするため、①特定の言語社会(speech community)における、また②発話事象(speech event)という伝達行動を単位に、③その社会の発話状況(speech situation)を規定し、④発話行為(speech act)を抽出するという手順を設定した。

そして、コンテキスト重視の考え方を、Silverstein (1976) は指標性(indexicality)という概念を用いて説明した。これは、言語には①明示的意味を有する指示的機能(referential function)があり、そのほかに、②時制表現、指示語、人称代名詞などの指示的指標(referential index)と、③敬意、会話の参加者、性別などを投影する非指示的指標(non referential index)があるとされている。

言語構造が社会構造に影響を与え、言語構造を変えない限り社会構造は変わらないとし、言語研究を社会運動にまで発展させたのが、いわゆるフェミニズム運動である。言語とジェンダーの原点と言われる Lakoff (1973, 1975) は、Chomsky 的統語論の自律性を批判しつつ、コンテキストや会話参加者の話題に対する態度などを考慮すべきことを述べ、社会的運動の視点から、「言語の不均衡は社会の不公正につながる」という基本的な考え方のもとに、女性語が社会における女性の地位を低下させていると主張した。

このように Hymes によって提唱されたコンテキスト重視の言語分析は、ほぼ同時期に生まれた会話分析、談話分析などとともに社会言語学の方法論の中でも大きな地位を占めるようになった。

第2の視点は、一般に言語のバリエーションと呼ばれるものを指し、年齢、性別、社会階層、職業、地域差のような社会的要因がことばの使い方にどのような差を生じさせているかを明らかにするものである。

Labov は、ニューヨーク市の百貨店における調査分析で、社会階層、改まり度合い、使用者の威信形式への配慮などの社会的要因と言語との関係を明らかにした。Labov の調査・分析手法の社会言語学的意義は、社会言語学にサンプリング、都市調査、量的把握、理論的枠組みを与える変項規則の確率論的観点を与えた点にある。この方法は、Trudgill の英国ノリッジ地方

の発音研究、Wolfram (1969)をはじめとするアメリカ黒人英語研究などに受け継がれた。

しかし、Labovの方法は、階層などで個人の社会的アイデンティティを決め、あらかじめ想定した言語変項と関係づけるという静的なものである。これに対し、Milroy (1980)は、個人の持つネットワークが場面に応じて異なる「ネットワーク理論」で、より動的な人間生活の現実に迫る方法論を展開した。このバリエーション研究には、都市の言語共同体 (speech community) における言語変化、テキストの歴史の変異分析、ピジン・クレオール、方言地理学、言語の衰退と滅亡研究等の分野が存在する。

第3の視点は、相互作用社会言語学(やりとりの社会言語学: interactional sociolinguistics)と言われるもので、Gumperz (1971)によって提唱された。Gumperzは、社会言語学は社会構造と言語構造との間の相互関係を発見し、実際に起こるあらゆる変化を観察する試みとして、「言語と社会の相関を見るマクロ社会言語学」と「個人のコミュニケーションによるミクロ社会言語学」の融合を唱えている。Gumperzの研究の中心は、伝統的な言語学が取り上げてきた形式的・命題的側面が表す象徴的意味が、対人的なコミュニケーションにおいてどのような推論の過程を経て適切な(または不適切な)相互行為を生み出すかに主眼が置かれている。

Gumperzの分析のポイントは、場面の手がかり (contextualization cue) であり、「会話参加者のコンテキストが、相互行為の中で同時に更新されていく」という新しい見解を示し注目された。Gumperzは、コミュニケーションの民族誌、談話分析、会話分析などの限界を示しつつも包括的会話の推論のプロセスを論じ、異文化間コミュニケーションの社会言語学とも言うべき分野を確立した。これによりGumperzは、従来の社会言語学的前提では説明しきれない現代都市社会、多民族社会の状況における言語に起因する問題の解決を目指した。

さらにTannen (1984)は発話された内容ばかりでなく、ポーズの位置や長さ、ピッチ、パラ言語的特徴など、どのように発話されたかという会話スタイルの分析で相互作用社会言語学に1分野を築いた。

マクロ社会言語学とミクロ社会言語学

社会言語学は、国家、民族、社会階級、性別、年代などの属性と言語共同体全体を研究対象とする「マクロ社会言語学」と、2人以上の関係性を社会ととらえ、そこにおける人と人との関係性から言語特徴を考える「ミクロ社会言語学」にも分類される。さらに、ミクロ社会言語学は、参加者、状況、話題、機能等に着目し、そのバリエーションの特徴を静的アプローチと動的アプローチから明らかにしようとするものである。

静的アプローチは、言語変異の要因を話し手の属性や状況、話題に着目し、「ある状況 X であれば、Y という言語スタイルをとることが多い」という含意的研究を指す。

典型的研究としては、Labov (1972b)の社会的権威や社会階級と言語発音に関する研究が挙げられる。また、アメリカ英語のバリエーションを地理的分布との関連から明らかにした地域方言研究、さらに、黒人英語研究に代表される社会方言研究などがある。社会方言研究は、一方で、ピジン・クレオール研究として大きなジャンルを構成している。

また、年代との関連では、若者ことばや、高校生の発音研究 (Eckert)、ののしりことば研究 (Andersson, Trudgill) などがある。

さらに、ジェンダーと言語については、Lakoff (1973, 1975)を基点に、数多くの研究が生まれ、フェミニズム研究としても多彩な研究が多い。また、言語変種は、レジスターとして職

業集団などにも存在し、日本語でも位相語として知られている。

一方、動的アプローチは、含意性だけでは実際の会話とはとらえきれないとし、話し手は、常に状況に応じて変種(スタイル)を使い分けているという立場をとる。またレジスターの観点からも、スタイルに応じて1人の人間がさまざまなレジスターを操ることもある。Ferguson (1959) は、2言語使用社会における、変種の使い分けを H 変種、L 変種という概念で明らかにし、こうした2言語変種が同時に存在している社会をダイグロシヤ (diglossia) と定義した。2言語・多言語社会において、人は相手との関係性において、コード・スイッチングをすることを Gumperz (1982a) をはじめ多くの研究者が明らかにしている。また、Lambert (1967) は言語変種の使い分けパターンを「社会的ステレオタイプ」という概念で説明した。

さらに、近年では、この静的・動的アプローチを融合し、実際の会話をより立体的にとらえようとする方法が注目を集めている。ポライトネス研究やわきまえ理論 (Ide 1989) などがその代表例と言える。

日本の社会言語学

日本に欧米型の社会言語学の諸概念が紹介されたのは1960~70年代であるが、それ以前からわが国には研究の視点や方法の面で社会言語学と多くを共有する言語生活研究が存在していた。後者の研究は第2次大戦を境に戦前と戦後で様相を異にする。

戦前においてまず特筆すべきは、明治時代以来の国語学の動きである。国語学はそれ以前においても歌学をはじめとする古い歴史を持っていたが、明治になって欧米の言語学の方法を取り入れ、新しい文法体系の樹立、国語の系統並びに歴史、方言や音声に関する研究など、はじめて科学的体系を持った学問として創始された。このように国語学は言語研究の近代的学問の起源としての意義を持ち、現代に至るまでわが国の国語問題に影響を与えている。また社会言語学的視点の研究では、菊沢 (1933) が社会的属性差と文体差(スタイル)の側面から言語変種とその使用の説明のために「位相」という概念を提唱した。

戦後になって注目すべきことは、時枝の「言語過程説」(1941)と1948年に設立された国立国語研究所の活動である。特に、政府の言語政策推進のための基礎調査を目的に設立された国立国語研究所は、語彙調査、地域社会の言語生活調査、方言調査、言語体系の分析・記述についての研究、国語教育・言語発達の研究などを行い、後の社会言語学研究の基盤となった。これらの研究の特徴は、社会調査・統計的手法を用いた大規模なグループ研究によるマクロな実態調査であり、欧米の社会言語学に先んじていると言える(南 1973, 1982)。

このように日本の社会言語学は、国語学の展開とともに独自の進歩をとげてきた歴史があり、欧米の社会言語学とはおのずと違いがある。1960~70年代以降は、欧米の社会言語学の成果を摂取する中で発展し、方言学やバリエーション研究、性差や階層差の研究、語用論や発話行為の研究、言語政策分野の研究など多方面に広がっている。また最近では、文化人類学、社会学、情報工学その他の分野との連携で、言語を文化・社会との関わりにおいて学際的に解明する研究が推進されている。

今後の日本における社会言語学は、一方では日本語という独自の立場に基づく研究を深めつつ、他方、欧米をはじめとする諸外国の研究を積極的に利用しながら、一層の発展を続けることが期待される。

(阿部圭子)